

スタディガイド

(学習指導書)

〈教育相談〉

『要説 発達・学習・教育臨床の心理学』

柴田 良一

法政大学通信教育部

スタディガイド（学習指導書）について

このスタディガイド（学習指導書）は「教育相談」を履修するにあたり、指定市販本教科書『要説 発達・学習・教育臨床の心理学』（北大路書房）を本学通信教育課程で学習する際の手助けとなるよう作成されたものです。

今後、指定市販本教科書で学習を進めていくにあたって、このスタディガイド（学習指導書）を大いに活用して学習に励んでください。

法政大学通信教育部

1. 心はどのように問題にできるか

あなたが今、ここで気になっていることが心への入り口だ。心を巡ってあなたが何を問うか、どんな答えに納得できるかが、「心とは何か」を決めることになる。あなたの問いを確かめてみてほしい。

問いを確かめるには、心を見つけることになる。心を見つけるというのは、今ここで、自分に意識を向けることだ。自分を見つけることだ。外に向かって働きかける自分をほんのしばらく休みにして、力を自分の内に向けることだ。そうすれば、今の自分の様子がみえてくる。自分が心というものをどうみているか、どんな答えをほしがっているのかという自分の問題意識が、はっきりするはずだ。

心を見つけるというのは、自分の体験といろいろな理屈や理論を照合して、双方を吟味することだ。体験と理論を突き合わせて、両者がピタリと重なるところ、あてはまるところと、ずれるところ、対応するものがないところとを明らかにすることだ。理論と、その基礎になった体験的あるいは実験的事実の両方を、自覚的に再確認し、事実を整理する枠組みとしての理論と、論理の飛躍と、事実そのものとの区別をはっきりさせることだ。また、理論の背景にある意識されにくい人間観を明らかに浮かび上がらせつつ、それらが人間の可能性をどのようにとらえているのか再吟味することだ。

ところが、個人の人生の幸福にかかわる最も大事な疑問には、はっきりした答えがないというのが真実かもしれない。つまり、心を見つけることも万能ではない。一番困ったことは、心を見つめて自分にわかったそのままを、ほかの人と共有できない(公共客観性がない)点だろう。人の心が科学の対象になりにくい根本の原因も、個人の体験内容については科学的検証が困難だということにある。

とはいえ、心を見つめると、みつめてわかったことが自分にとっては真実だという、はっきりした感じ(心理学的明証性)が自覚できるはずだ。心理学的明証性があるということが、ふだんは意識していない自分の心、つまり、潜在意識が働いている証拠だ。時・所・人ならびに現在の状況を正しく了解する能力(見当識)も潜在意識の働きだ。

心を見つけることは、「自己省察」とか広義の「内観」と呼ばれて、「内観療法」やカウンセラーという専門家の助けを借りてなされるとカウンセリングにつながる。

3 方向からの問いかけ

つぎに教師という職に必要な、心についての大まかな問いを列挙してみよう。教師は日々さまざまな教育の場面を通じて、個々の生徒をなるべくトータルに、すなわち、かなりの困難はともなうが、「行動」と「思い・考え・気持ち」と「からだ」の3つの側面のすべてについて、可能な限りの確に生徒個人を理解して、生活指導にあたるのが望ましい。同時に、生徒自らが自分の行動と思い・考え・気持ちとからだのそれぞれの側面を鋭敏に自覚でき、それに基づいて適切に自己管理できるよう、自分というもののとらえ方と対処について教えておくことが重要だろう。

からだ—心—思い・考え・気持ち

↓
行動

- A. 行動の一般法則を解明したい：「行動の科学」としての現代心理学の問いでもある。ある個人がなぜその行動をしたか、具体的に原因と背景を知りたい場合（現実が発する行動の個別性に関する問い）も重要である。
- B. 自分の心や他人の心を知りたい。自他の思いや考えや気持ちを明確に、誤りなくわかりたい：自分の心に写った人や人の行動、物、出来事とそのつながりに自分が納得できる意味を付与する「了解」という理解の方法。
- C. 「からだを作る心」「心が支えるからだ」という、心身の関連の理解と心身の健康の獲得・維持をめざす問い：病気、障害、虚弱などで教育上の特別の支援を要する生徒の中には、体力気力を温存し回復を図る主旨から、休息を優先できる訪問教育で対応するなどの配慮が必要で、かつ有効な場合がある。教師は、生徒がいま学習課題を「解けるか・解けないか」だけでなく、長期的にみて生徒の体力気力の消耗を防ぎ、体調を悪化させずに続けられる教育を考慮し工夫することが望ましい。

2. 教育相談－生活指導のなかの支援

学校ソーシャル・ケースワークと学校カウンセリング

生活指導の領域は、社会人として必要な心がけや習慣を身につけるように、児童・生徒を教育する「訓育」と、日々の学業がうまくいくようにさまざまな援助を配置する「支援」に分けられる。生活指導における生徒支援の目的は、個々の生徒の健全な成長を確保していくための諸条件を整えることである。

「教育相談」は広く教育に関する相談に応じる専門活動であり、生徒に対する支援も重要な任務である。治療指導としての教育相談は、すなわち知能障害、情緒障害、反社会的行動、非社会的行動などを示す生徒について、その原因を明らかにし、症状に応じて対応することは、もっとも普通におこなわれてきた。

生徒に対する支援は、生徒の家庭環境を調整して、個人の全人的発達と修学の経済的・社会的基盤を保障しようとする、学校ソーシャル・ケースワーク的方向と、生徒の内面世界を理解し精神的成長を支える、学校カウンセリング的方向に大別される。学校は、ソーシャル・ケースワークの活動分野であり、教師、養護教諭、スクールカウンセラーなどもこの役割を共有することが期待されるが、支援しようとする側すべてに必要な基本的心構えは、支援を必要とする人々へのいたわりであろう。ソーシャル・ケースワークの本来の目的は、援助を必要とする個人とその環境の全体または一部との間によりよい適応をもたらすことであり、その目的達成のために個人の内的な力と社会資源の両者を並んで重視し動員する、社会福祉個別援助である。社会資源の動員とは、行政との連携も含めて、実際に経済的・社会的、物的援助をおこない、医療その他の専門家や必要な技能を持つ人を、援助を必要とする個人の福祉へ結びつける実践を意味する。ソーシャル・ケースワークも問題の個別性の重視、援助依頼者に対する受容、援助依頼者の自己決定、秘密の保持などを基本原則としている点では、心理カウンセリングをおこなうカウンセラーと共通する。

学校ソーシャル・ケースワークの重要性

現代の資本主義は、資本を投資し回収して差益を稼ぐことで成り立ち、常に新たな投資の機会を創出すべく、地球規模で企業間の競争をうながす。企業は活発化した企業間の競争に勝ち抜くため、人的経費の縮減策として雇用の流

動化を図る。その結果、正社員とフリーターやアルバイト、派遣、請負などの非正規雇用者の賃金格差は現状でさえ大きく、さらに拡大する傾向にある。働く者にはリストラ(首切り)され失職する危険がついてまわるし、家計の経済的格差が将来にわたり固定化する恐れがある。

このような世情下、2005年度に生活保護世帯数は初めて104万を越え、授業料や給食費が払えないとか、朝食を食べさせてもらえないなど、家庭の事情で修学が困難になる生徒も増加している。そのほかにも学校ソーシャル・ケースワークによる支援が必要なさまざまな事例が増えてきている。今まさに、学校ソーシャル・ケースワークの重要性はさらに高まっている。

3. 教育の問題を確率論的、発達心理学的、社会心理学的にみる

現在、生徒として学び、自己を育てつつ日々を送っていく(適応)上で、学校の生徒は仲間や教師との関係の、さまざまな問題をかかえることがある。不登校・保健室登校や深刻ないじめも増加し、少年犯罪は重大化・悪質化して、重い現実問題を突きつけている。生徒の気持ちが理解できない危機を乗り越えるために、まず、教師一人一人が自分の身のまわりに起こっているすべてのこと(報道に触れて偶然知ることを含む)に注意深くなくて、そこから今自分が当面している切実な問いの、答えに関するさまざまなヒントを集めることができる。たとえばいじめの報道に接して、自分の学校にもいじめがあるのではないかと気づくようなことである。このとき教師は、一種の確率論的世界観に立つことになる。確率論的見方は、偶然という形を借りて思いもかけぬ可能性を教え、判断の方向の誤りや、思いこみに基づく見落としに気づかせてくれる場合がある。

問題の輪郭がある程度ははっきりしたら、危機の原因を①集団(の対人関係)の過程を背景にみて、②今現在の諸条件の絡み合いととらえ、③遡って、個別の問題の発祥と進展の過程を解明する。危機の基底と好転の見通しを探り対処を工夫するために、この発達心理学的・社会心理学的観点が重要である。学級はほぼ同年齢人の等質的集団で、かなりの期間維持されるため、そこでの同じ一つの集団過程が教育のねらい通りの成果を期待できる反面、対人関係がゆがめば、不登校やいじめなどの苦難を個人にもたらす恐れもある。

現代日本の学校教育で最大の問題は、おそらくいじめであろう。真摯な取り組みによって解決に向かういじめももちろん多いが、いじめの一部は従来の

教育手法の裏をかくて実行を隠蔽するなど、いっそう陰湿化、悪質化して、痛ましいいじめ自殺まで多数発生している。この種のいじめをなくすことは、急務である。一部のいじめを犯罪行為とみなして警察が取り締まる対応が始まった。おとな社会がリストラ(首切り)目的で標的者への迫害を常套化させていることと、おとな社会の縮図といえる子供社会のこの事態とは、無縁ではなかろう。個々のいじめの原因の解明とその対策は、実態に即して個別に検討されなければならない。

悪しき権力への追従

学校は学年序列社会の側面がある。学級委員を先頭にいじめる例は、同学年のクラス内にも生じた見えない序列も、いじめを遮れない場合であろう。集団に所属する個人が他の成員から向けられる態度や行動は、評価として重大視される。目立てば「出る釘」とみられて制裁されやすく、「シカト(無視)」され、爪弾きされる。いじめられる側の信念や態度や行動を変化させて、いじめる側の基準に合わせようとする圧力が働いて、いじめへの同調が起こりやすくなる。納得がいかないまま表面的に同調する追従(規範的影響)では、個人の私的信念や態度は変化しない。いじめる者、いじめられる者、傍観者、観客の4項がいじめを補完・構成しているといわれる。いじめをとりまく傍観者と観客の、自らが標的となることへの抜きがたい恐怖と逃避が、保身のための悪しきいじめの権力へ同調を加速する。社会心理学者ミルグラムは、一旦悪しき権力に同調して命令―服従システムに組み込まれた人は、行為の結果責任を命令者に帰すが、命令者と同一視して(代理状態)実行しながら、行為責任を回避し、命令者だけを注視して犠牲者を無視していくことを実験で示した。教育も良識も抑止力になりにくい。

偏見からの迫害がいじめ

いじめは偏見に基づく一種の迫害の側面がある。欲求不満も、だれか(手本)がいじめるのをみる示範(モデリング)も、原因となりうる。集団内の多数者側が少数者に一方的に社会的烙印〔スティグマ(stigma)聖痕：原義は身体のシミ。転じて、他から否定的に区別されると本人が危惧する不利な特徴〕を押しつけ、異端視して差別し虐待している場合である。まず周囲が、ある人がスティグマをもつと断言し「札」を付ける。すると本人の自意識がかき立てら

れて、自分が劣って嫌われているから、いじめられると信じ込んで自己を疎外し、両者が虐待の悪循環をなす。スティグマの意識と否定的な自己評価は自尊心を傷つける。スティグマをもつとみなされた人は、偏見をもった側からは集団の均質性を乱す逸脱者とみえ、不快に感じる成員もある。だが、集団の均質性の回復を目的に「いじめてもやむをえない」と切り捨てるなら、加担までの心理的距離が縮まる。「いやだーしない」という感情的とらえ方は、未熟な心の表れなのだが、青年は道徳についても「説教臭いからいやだ」と忌避し、授業を欠席、教師に背を向ける。この点から、いじめの発生を防ごうと道徳教育だけを強化しても、成果を得るにはかなりの困難が予想される。

功利が反転して虐待、傍観

広義の功利が人を結びつけている。友人同士は、「同気相求める」のことは通り、意見、態度、価値観の一致や類似が対人的魅力として重要とわかる。自分に似た人は理解容易で親近感から友情に移行しやすいし、自分と似た人の存在が自分の立場を確認し支持してくれるので(社会的比較過程)、それが満足の源泉となり、惹かれ合うという。相手から好意的に評価されると、その相手を高く評価し魅力を感じやすい(好意の返報性。対人関係の互惠の収支を合わせる規範的動機づけ)。配偶者間では、求める目標や社会的役割に関しては、自分の望みを叶えてくれる相手に魅力を感じ、求める。

いじめや児童や高齢者への虐待などの深刻な点は、過重な負担(社会的、経済的、肉体的、心理的)に耐えかねた味方が、疲れ果て、追いつめられて裏切れる場合があるからである。信頼を寄せていた人からいじめられ、嘲られ、見殺しにされる。相互扶助や返報などの社会規範も、もはや十分な抑止力を発揮しない。すべてわかっていながら裏切る。理不尽と感じ、虚を突かれた痛みに、被虐待者側の人間信頼は真に深刻な深手を被る。自分が相手の重荷になっているという負い目が、非力な自分に絶望させて、人間性が危機に直面して自殺を企てさえる。「恩」は返報性の規範だが、売られると心理的重荷となって、陰惨ないじめや虐待を加速する場合さえある。いじめや虐待をやめさせようとする者が犠牲や負担を強いられるため介入しにくく、周りに人がいる状況では、人の性格とは無関係に、かえって介入が減る。不介入の責任も分散されやすく、介入の失敗を警戒して援助不要と誤認しがちなため、介入しにくい(傍観者効果)。心の深い結びつきを実感できるだれかに緊急に身柄を保護

してもらうなど、心身両面の支えの手配がぜひ必要になる。

4. 学校カウンセリング

カウンセリング(counseling)の原義は、「相談」や助言活動という意味で、なんらかの悩みや相談事を持ってやってくる人(来談者)と、その相談を受けるカウンセラーとの間の相談活動をいう。情報提供を主眼とするカウンセリングから、心の問題のとらえ方に応じて、体験過程を重視する方法、認知療法、論理療法、行動療法、ゲシュタルトセラピー、深層心理学の諸学派の影響を受けたカウンセリングなど、さまざまなカウンセリングが登場し、カウンセリングと心理療法のかつての区別は曖昧になった。なかでもカール ロジャーズ(Carl Rogers)の来談者中心カウンセリングが広く知られている。

来談者中心療法とロジャーズのパーソナリティ理論(自己理論)

ロジャーズの来談者中心療法は、カウンセラーが指導や助言や指示をあたえ、来談者は受動的に受けとる、説明ないし指示の色彩の濃いそれまでのカウンセラー主導のカウンセラー-来談者関係を、来談者の能動性を軸に逆転させて、カウンセリング関係を再構成したものである。

ロジャーズは、人はいかなる場合にも自己の人間的な成長をめざす前向きの姿勢(自己実現傾向)を持つと仮定した。この自己実現傾向が何らかの要因によって阻まれた結果が、不適応状態である。不適応状態から脱して、自ら環境に働きかけて実際に問題を解決できる、「適応可能なパーソナリティ」への、パーソナリティの変化を支えるために特にしつらえられた人間関係が、カウンセリングにはかならないとロジャーズはみた。

不適応状態は「自己概念」が「経験」と大きくかけ離れて固定化したために起こる。理想的自己と現実の自己との隔たりも大きい。自己概念とは、自分についての認知である。経験とは、みえる、聞こえてくる、感じとれるなど、現象的場をなす主観的世界であり、個人の内面的世界である。自己概念が固く不適切な場合には、それを経験と一致させることができない。経験に対して閉ざされてしまう。

カウンセリングの中で来談者は、今ここで生起している自分の体験過程と来談者-カウンセラー関係の過程を往復的に体験する。カウンセリングの感情面の過程に注目していることが重要である。カウンセリングを通して来談

者の主体的経験が尊重され明確化されると、来談者は次第に、いま自分に流れている感情を感じとれるようになり、経験に対して開かれ、自己知覚と外界の知覚に変化が起こる。これが行動の変化の主要因にもなる。来談者が自分の経験と自己概念の不一致に気づくようになれば、自己実現に向かう自己成長力が自然に作動して、固い自己概念は経験に一致するように変わりはじめ、両者は次第に重なり、不一致が解消していき、パーソナリティが統合された流動性をもつようになる。理想的自己と現実的自己との隔たりも縮まっていく。

カウンセラーの役割の重視

来談者の能動性を前提とする一方、ロジャーズはカウンセリングの過程で来談者の能動性をひきだすカウンセラーの役割を重視する。(1) 来談者があるがままに、無条件に積極的に尊重する「受容」(2) 来談者独自の価値観(内部的準拠枠)から感情移入して理解しつつ、心理的距離を保つ「共感的理解」ができ、それが来談者に最小限は知覚されていること(3)「カウンセラーの自己一致」つまり、カウンセリングの中でカウンセラーの思考と感情と行動(ことばと態度)が無理なく自然に一致していることの3点がカウンセラーに必須の態度とされた。このような来談者－カウンセラーの人間関係のあり方は、心理療法に共通する心理臨床の基盤である。

カウンセリング・マインドと「馴れ合い型学級崩壊」

集合的行動とは、災害時の群集行動など不特定多数の集合(マス)で発生する社会的現象で、所属集団内での規範的行動や役割行動とは明らかに異なり、個人がマスに規定され、匿名の一員としてとる行動を指す。群集心理を思わせる「反抗型学級崩壊」やリンチとまごういじめも歯止めのきかない点で、その諸個人の無意識層は、このメカニズムとの関連が疑われる。個人の態度は教育や説得を以てしても、情緒次元の変化なしには変わりにくいが、集団の準拠枠の変更やオピニオン・リーダーへの情緒的包絡で、それまでとちがう方向に変化する可能性が高いため、感情面にまでしみ通る納得を求めて「カウンセリング・マインド」が重視されてきた。

学校カウンセリングでいうカウンセリング・マインドとは、ストレスへの生徒自身の対処を助け、情緒的苦痛を軽減することと、対処法の獲得をうながすことを十分意識して、共感的に理解しようと接することを意味する。教育

を生徒－教師の信頼関係の上に成り立つ営みととらえ、生徒が自ら成長を求める存在であるとみれば、生徒－教師の関係を、来談者－カウンセラーの関係と近似させてとらえることが可能である。ところが、信頼関係を悪用して教師と生徒の立場の違いまで突き崩した「馴れ合い型学級崩壊」など、カウンセリング・マインドだけでは有効な対処がむずかしい諸事例も発生し、波紋を広げている。

共感の多面性

「共感」は、共感的理解以外にも多面的な心理を理解するカギになる。

二重拘束

うわべで共感を装っても、有害無益な場合さえある。人類学者ベイトソンは統合失調症の患者が母親や家族とのうわべと真意が不一致の葛藤関係に継続して囲まれて育ったことが発症の原因とみて、一過性の心的外傷(トラウマ)体験には帰さない。心理的距離の近い2者間のコミュニケーションで、うわべと真意が矛盾すると、受け手がねじれた感情の葛藤に身動きがとれなくなることを「二重拘束("double bind")」と名づけた。アンビバレンツ(両価的＝どっちつかず)な感情表出と、それへの迷いの反応という関連とみる。彼はこれを理論的基礎に、家族を単位とする治療(家族療法)の必要性を主張した。

共感の循環

これとは逆に、人と人が肝胆相照らし、チームメンバーの気持ちが通い合うように、主観同士が見通せる共感的関係[「間主観的關係(intersubjective relationship)」]が樹立されると、一方が感じとったままに相手にはたらきかける、その共感的応答が、今度は相手を支持する役割をして、相手の自己を確認させ、相手に自己を受容させて、相手の共感を引き出し、さらにそれが両者の円滑な対人関係を生みだしていく、よい循環の条件をなす。

信頼から共感へ

共感の起源は、乳児期の養育者(多くは母親)の態度にある。精神分析学者エリクソンがいう、生後1年間に乳児が獲得する信頼を可能にした養育者の諸条件と相似の機能を、ロジャーズはカウンセリングの領域の「ラポール」や

「共感的理解」とみて重視した。ロジャーズはカウンセリングの過程で、来談者の能動性が引き出される契機として、カウンセラーの存在と役割を重視する。この主張は、カウンセラーが判断のカギとなる情報に気づき、それを来談者に伝えて彼の能動性が高まる可能性を排除するものではない。精神分析学者コフトは、共感とは治療的な意義を強く含んでいて、カウンセラーのとるべき共通普遍の態度を越えると主張した。カウンセラーの共感的態度が、来談者に自己を確認させ、高い自己評価を与える働きをして、来談者が生きるのに必要な愛を自分に向けられるようになるので、拡散した自己が統合され、独立した自己が形成されていくという。

感情転移

共感の深層は、精神分析学では感情転移と逆転移(対抗感情転移)、つまり無意識の感情的牽引と反発に関連して理解される。感情転移とは、精神分析治療中に患者が無意識的に、幼児期に養育者に対して抱いていた感情を分析者に向けることをいい、逆転移とは、患者の感情に巻き込まれた分析者が患者に、自分のそれに向けることをいう。転移感情には好意(陽性感情転移)と嫌悪や憎悪(陰性感情転移)の相反する2方向がある。患者も分析者も強い感情にとらわれて冷静さを失った結果起きた認識である。感情転移も逆転移も分析して治療に生かすべきものである。逆転移の分析の観点から、カウンセラーの来談者に対する反応が、じつは来談者の感情を表していたとわかる場合もある。また、来談者の強い感情への共感が、カウンセラーからの逆転移を含む場合があることに留意すべきである。無意識の逆転移を洞察しきれないと、同情して鬱的になり、かえって問題から立ち上がらせていく援助の力が出せなくなるなどの支障が生じたり、カウンセリング関係が私的關係に変質する懸念がある。対策の要諦は、カウンセリングの過程を既定の型どおりに進めて不規則行動を防ぎ、スーパービジョン(教育分析者からの助言)を受け、カウンセラーが自分の心理的混乱と過去の経験を自己分析して、来談者の内的世界を感じとろうとして生じたその同じ感情が、自分の成育史の特定のエピソードに由来すると納得することである。

5. 性格を巡る問い

性格とは何か? とは、ある個人がどんな人柄かという問いである。性格をみ

る問題意識が観点を作り出す。観点のあり方がどう見えるかを左右する。これらの観点は、無意識に使われて偏見やひいき目といった理解の偏りを生み出す恐れもある。教師としての自分の観点を意識化してみることは、偏らない性格理解のために重要である。①独自性－他人との違い、その人らしさ②一貫性－いつも同じ③形成性－変わるものだ④相互影響性－個人が互いに影響しあう⑤総合性－まとまりがある⑥一回性－人生は一回きりだ⑦遺伝性－遺伝するものだ⑧不可知性－絶対わかりきれないなどの観点がある。

性格の定義は学者一人に定義一つといわれるほど多様で、力点も異なる。心理学では、「性格」あるいは「パーソナリティ」という術語(学問の専門用語)は、大まかに言って、性格 character ヨーロッパ中心で遺伝、体質を重視。パーソナリティ personality 米国中心で環境による形成を重視という使い分けをする。

パーソナリティ心理学者オルポート(Allport, G. W.)の定義「パーソナリティとは、個人を特徴づけている行動と思考とを決定する精神・身体的システムであって、その個人の内部に存在する力動的な組織である」を取り上げれば、パーソナリティは 1. 個人の行動だけでなく、ものの考え方をも決定するとみる 2. 心とからだの統合的されたシステムであるとみる 3. 個人の内部にあるとみている 4. 力動的(ダイナミック)な組織とは、ちょうど輪ゴムの一ヶ所を引っ張ると、そこだけでなく全体が伸びようとするように、組織の一部の変化が組織全体を変化させつつも、組織としての統合を保っているような組織のあり方のことである。

性格の理論－類型論 特性論 構造論

性格の理論には、ちょうど昆虫図鑑をみて虫を調べるような「類型論」、自動車のカatalogで個々の車の性能を比較するような「特性論」、建物全体の見取図をみて、建物の造りや組み立てを知る「構造論」の3種類の理論化の方法がある。そしてこの「ちょうど○○のように」というわかり方こそ、典型例を使った類型論に他ならない。また、「わかる」とは、調べた虫が蝶(の仲間)に分けられると知って納得することだから、わかるとは「分けること」である。

精神分析のいう心の発達 深層心理学

精神分析の創始者フロイト(Sigmund Freud)は、意識できない心の深い層の働きが行動を決めていて、思い出すと不快になる事柄や考えを思い出せなくする「抑圧」の働きの高さの程度によって、個々の事柄や考えや感情が思い出されたり忘れられたりする(意識一下意識という心の「深さ」の次元を往復する)と主張した。

パーソナリティの全体構造

精神分析の立場からは、パーソナリティはイド、自我、超自我の3つの部分から成り立つ。イドは無意識の心的エネルギーの塊で、本能的衝動はイドの重要な部分である。自我はイドの要求と超自我の規制とを仲裁して、不安を感じないですむような衝動の表しかたを工夫する調整の働きをする部分で、イドの一部から自我ができた。超自我は、誕生と同時に始まる、自分と社会や環境とのかかわりによって生じた、社会的制約やしつけ、道徳、良心などが子供の心の中に取り入れられて、心の声として子供自身の気持ちや考えと行動を制限するようになった(内面化された)ものである。超自我には自分の理想像である自我理想と、「××するな!」と自分に警告する良心の2面がある。イドと超自我に挟み打ちされる葛藤で自我の領域が狭まると、自我の調整機能が低下し、現実には適合した行動や考えがとりにくくなり、不安に対する病的な防衛機制が定着して神経症やヒステリーが起きる。

精神分析治療は、患者にイドと超自我の無意識の葛藤の原因を納得(洞察)させる援助である。洞察が起これば自我の領域が病前の大きさに戻るか、それ以上に拡大し調整機能が十分に働くので、それらが治るという。

精神分析からみる性格

必ず2種類以上の自我の防衛機制が組み合わされて使われる。組み合わせの内容の個人差と、使用頻度の個人差が、精神分析からみた性格である。また円満な性格とは、自我の防衛機制を使わずに過ごすのではなく、適時に適切な自我の防衛機制が働いて、不安を感じずに生活できることをいう。

不安の3つの解消方向

潜在意識にある不安は、何かの形で表現されれば解消される。不安の表現には3つの方向がある。どの方向に、どんな頻度で表現するかは個人差が、個人の性格の一面だ。①不安が対人関係のいさかいや冒険を引き起こす**行動化**：行動化しやすい個人はその行動力を人のために使えば、自分も認められ居場所ができるはずだ。そのための指導を工夫できれば、その人を生かすことができる ②不安があると悩む**精神化**：青年は悩んでいることをことばにして訴えてから、自殺を試みるまで時間をおかない場合があり、注意を要する。悩むためには、自分をみつめるもう一人の自分が育っていなければならない。だから悩むのはおとなに近づいた証拠である。子供たちはかなり低年齢から悩むことができるようだ。遊戯療法とは別の方向から、子供の悩みを解消する援助のあり方を再検討する必要があるだろう ③不安がからだの不調を引き起こす**身体化**：おとなにもあるが、主として乳幼児に多い。3つの表現法のうちのどれか1つをとれば、残りの表し方は相対的に少なくなるとみると、自分は苦しいが、悩みやからだの不調は、相手を傷つけないための攻撃の安全弁として働いている。

青年と養育者の依存と自立を巡る心の葛藤と、しつけのゆらぎ 治安の悪化と養育者の不安

子供の自立をうながす幼児期以降も、養育者が子供が自力でできるところまで世話し指図する養育態度を過保護とよぶ。治安が急速に悪化して、子供の通学さえ安心できない現在、過保護的態度は青年期後期まで維持されることがある。過保護が望ましくないという社会通念もあり、子供の自由を広く認めたいが、安全はどのように確保すべきか、多くの親や家族が迷いをかかえている。障害などで手厚い保護が必須の場合がある。過保護的養育態度は養育者が①子供の要求に従属する溺愛②子供を思いどおりにしたい支配③不安から保護を与える側面があり、保護の量的過剰と過干渉(介入過剰)の両面がみえる。精神科医ファンデンベルクは、乳幼児期の母子関係は単純なものではなく、過介入とか愛情の剥奪(愛情遮断＝養育と保護が与えられなくなる)で一面的に理解することはせず、親の子供に対するアンビバレンツ(たとえば過保護でありながら世話を面倒がるなど、子供に向ける感情が分裂している状態)が継続すると、子供が自由を失うことの方が、より深刻な影響があ

るという。養育者側の原因が広範で根深いため、過保護の修正は予想以上に困難である。周囲から過保護を指摘された親が迷って、必要な保護や愛情まで拒否する態度をとる場合もある。児童精神科医で小児科医のウィニコットは、生きる支障にならない程度に安心と満足をあたえる養育者が、子供を欲求不満になじませる重要な役割を担うと主張する。だが、日本の母子関係の特徴である情緒の相互依存が、自立的個人の結合である家族とは違った粘り強い凝集力を作り出している可能性がある。

依存と自立の葛藤の激化

青年も親も、青年の依存と自立を巡ってそれぞれに心理的葛藤をかかえる。青年の親殺しや家庭内暴力に、過保護の問題が深く関わる場合がある。思春期以降も養育者が過保護な態度で子供を包み込もうとすると、十分に自立できない未熟さの壁を意識し、虚勢を張ってそれを隠そうとしている青年が、養育者の愛情に絡め取られる閉塞感に挟撃されて、高まる葛藤を逃れるため親や家族に抑制のきかない暴力をふるい、過ぎれば親殺しもありうる。青年がなぜこの行動をしたのか(行動の個別性の問い)に発達心理学から答えようとすると、事件や社会問題化した典型的事例の分析からも、発達の個別性をつかみ出す努力をしなければならない。

自立とは？

親と社会と青年自身は、めざす自立の内容さえばらばらな場合がある。親の庇護なしにわが子が生存できる、個人の生活力としての経済的自立を願い、社会は理念として、考え判断し行動する主体としての独立した人格を求め、青年に「自分の行動について、他人もおこなっているからといって責任を免れることはできない」と自覚を促す。だが、「宇宙そのものが相互依存する重層的システムである」とする世界観を学ぶと、青年は自立とはどうすることかとの本質的な問いに目覚める。青年にどんな自立を求め、どのように納得させるか、教育が問われている。

6. 現代社会のゆがみがもたらす青年心理の騷り

疎外—現代社会の基底にある社会と個人の亀裂

現代社会は情報通信と文明の利器の発達と普及によって、日常の便利と引

き替えに、人間関係さえ機械を介さずには結べないため、人間関係がますます間接化、皮相的化、稀薄化した。人間は情報や仕事に応じて部分に分けられ断片化して、個としてのまとまりを回復しにくい。現代社会は個人をその代替可能な匿名の部品とみなしている。資本主義社会では、労働は商品である。カール・マルクスは人は自らの労働から疎外され、労働はだれかに私有されて、強制的で非創造的だという。自分が社会からも労働からも隔てられてしか存在できない「疎外」は、資本主義社会の帰結とみる。現代人の大半は、自分が生きる意味や自分の人生の目的を自問しても、はっきりした答えを出すことはむずかしい。精神科医フランクフルはこれを「実存的空虚」と呼んだ。

青年の自意識が生む自己疎外

遠い将来の大目標から逆算されたいくつもの手段的目標行動を親や教師が次々に要求すると、青年は遂行しても達成の喜びに浸れず、かえって大目標との距離が縮まらない焦燥感が募って、心身に疲れを残しがちである。手段的目標追求を積み重ねて成功しても、短期的な達成感を実感したい青年の希望と相いれない。また、青年期は自分の心身と他者に同時に積極的に適応していくことを要求されるが、どちらも容易でない。醜貌恐怖・自己臭恐怖など、自分のからだが他者との良好な関係の邪魔をする恐れをいだくが、根本的改善策をもてない。青年は自意識のめざめるが、まるごとの自分を受容できない。他人の言動が自分への厳しい評価とみえて動揺し、自己卑下が生じて自己不全感が強まる。低い自己評価は自己疎外(自分の感情が部分的にしか感じられなくなり、能動性が低下し、社会適応が困難になる)に通じやすい。自己破壊衝動が強まると、自殺企図や非行など反社会的行動にもつながる。成人期以降も同じ自己疎外が形を変えて再現される可能性がある。思いのほか早い性格の形成に、現代社会の疎外が誘導する自己疎外が深く関わっている。

獲得性無気力ー地球規模の難問題がすべての庶民に覆い被せる絶望感

現代に生きる私たちは地球規模でも局地的にも、多くの困難な問題に直面している。地球規模の温暖化、環境破壊、天然資源の独占と枯渇、社会的差別と搾取、貧富の差の拡大と固定化、テロの脅威、地域紛争、新しい疫病の脅威、天変地異、コンピューター社会の脆弱性と情報棄民、経済の停滞など多

様である。これらの諸問題は規模や種類や場所を異にするが、その多くを引き起こしている原因と動機については通底している。たとえば国境を越える資本の冷徹でゆがんだ論理や国家の意志などと、個人を超越する力として抽象的に表現されるが、原因を作っている一握りの人たちと動機については隠蔽される。戦争や天災は大規模な破壊だが商機を呼び、資源の枯渇は高騰の暴力を生む。差別は搾取に利用される。別々のものにみえる難問題が深いところで複雑に絡みあい、互いを生み出しあいながら進行している。報道の断片を集めても、事の真相は理解できない。根本原因の特定さえも至難である。解決をめざそうにも、どうすればよいか見当もつかない。真剣に考えれば無力感に襲われる。獲得生無気力(苦痛な状況を変えられず、苦痛を減らすことができない経験から、努力一般が信頼できなくなる結果、広範囲にかつ深く意欲の基盤を喪失する無気力)である。

これらの難問題は私たちの社会にも大きな影響を及ぼし、個人の暮らしと心身まで窮屈にして疲弊させる。苦痛を終わらせる根本的対処は不可能である。時代と世界の変化を耐え抜くため、暮らしにつながる諸制度を変えようとすれば、かえって社会のひずみを拡大させ、個人の存立基盤まで危うくする。一方、個人が問題に働きかけて解決していかれるとは信じがたい。対処可能性は小さい。このような状況が生む深刻なストレスが、さまざまなタイプの無気力や逸脱行動を増加させるが、個人レベルの改善すら容易でない。

このような行き詰まり状況下、教師にできることは少なくない。たとえば、生徒に①すでに解決に参加(身近なゴミを減らすなど)していて、個人の努力で解決の糸口を作る機会(たとえば投書やブログでの意見発表)もあることを再確認して励まし、たとえわずかな成果でも認める②皮相な理解を提供して樂觀させることなく、協力して人間と社会の核心について、事実 に即して具体的に考え、意見を交換しあいながら、事態を改善する方向の問題意識を掻きたて深めさせることではないか。地球規模の難問題が個人の心理に投影した不安やいらだちに、問題の構造を俯瞰しようとするこうした作業なしに向き合うことは困難だろう。

青年のアイデンティティ形成を困難にする現代社会

アイデンティティとは「自分とは何か」という自己規定であり、パーソナリティの核の独自性と一貫性に関わって、過去から現在、未来への自己の展

望を含む。アイデンティティには個人の内面(の緊張)が社会と関連する(社会的自己の)側面があり、社会的役割や役割行動に対する他者の評価基準が明確なほど容易に形成される。エリクソンはアイデンティティの確立は、個人のパーソナリティの発達にきわめて重要な意味があるという。

現代、個人の自由を広く許容しようとして、職業も通過儀礼も、そのほか多くの社会的活動までも社会的意味を薄め、個人的な選択ととらえるようになった。一方社会の側に、個人の行動を導き客観視と自己調整を可能にする、安定した価値体系をみつけることはむずかしい。社会も、個人の生活様式や考え方も流動し激変している。個人が自分の選択の適切さや有効性を知るより先に、社会が変化してしまう。個人は社会の変化を予測して、十分に準備することができない。他人の経験は、今現在の他人の行動でさえ、これから先の自分の行動の手本としては十分でない。個人は個人的な体験を、その適切さや有効性が見通せないまま重ねざるをえない。アイデンティティは個人が手探りで独自に作り上げるものになった。その結果、自分が今受けている専門教育や現在の職業の将来的価値を疑問視して、生き抜く自信を喪失する無気力(スチューデントアパシーや退却神経症)が広まりやすい。

青年の職業意識

社会構造の大変動もアイデンティティの基礎を揺るがし、アイデンティティを不安定にしている。たとえば職業は、個人のアイデンティティの一つの柱である。ほとんどの場合、職業選択には無意識的にもせよ「生計が成り立つ」という前提枠がはめられる。ここに人間が自己の労働から疎外される根本があるのだが、この前提が選択の方向を刈り揃え、個人に独自であるはずのアイデンティティを、かなり斉一化してしまう。「総務省平成 16 年度 青少年の社会的自立に関する意識調査」によれば、「自分が大人になったと自覚している」青少年は 60.1%で、大人になったと自覚したきっかけは、職業生活のスタート(21.2%)、親からの経済的独立(13.2%)、20 歳になったこと(12.8%)、親からの精神的独立(10.1%)などが続く。また、大人になったと自覚はしているが、「特にはっきりした区切りはない」が 6.8%、「まだ大人になったとは感じていない」は 33.0%である。人生観について問うと、「学校を卒業したら、できるだけ早く就職して、親から経済的に自立すべきだ」(39.5%)が最も多く、「年齢よりも実績によって給与が決められる方がよい」(38.8%)、

「収入に恵まれなくても自分のやりたい仕事をしたい」(38.4%)、「将来について夢を持っている」(34.3%)が、その準備は「資格を取る」が多い。「努力すれば満足できる地位や収入は得られるものだ」(32.8%)、「私生活を犠牲にしてまで、仕事に打ち込むつもりはない」(30.5%)、「フリーターや派遣社員は長期間続けるべき仕事ではない」(25.5%)などと考えていて、かなり醒めて将来を見通した、現実的な見方をしている。

雇用が生計を保証しない

職業選択は個人の自由と責任と位置づけられるようになって、雇用の機会を増やし、良き仕事と職場を準備する労働条件の整備、能力開発のための再教育支援、再雇用の機会確保など、働くことと働く者を支援する社会の姿勢を問うことは後回しにされてしまう。仕事の分野の雇用流動化、雇用形態・就業形態の多様化などの社会の変化は、働く者に、継続して生計が維持できる仕事と身分を保証しない。反面、継続して生計が維持できる経済的基盤の獲得が、働く者が仕事を選ぶ際の重要な優先基準である点は、基本的に変化はない。ここに社会構造と個人の希望の鋭く厳しい対立が生じている。新卒採用時点で正社員になれないとか、不景気のなかでリストラ(首切り)され職を失えば、フリーターやアルバイトなどの非正規雇用者として働き続けるが、挽回は年齢とともに急速に望み薄となっていく。そのまま安定した職につけなければ、この賃金格差が生涯固定化してしまう懸念さえある。

内向きにされる問題意識

ところが、個人の自己実現が理想として唱導され、社会に広く受け入れられて青年期の「自分探し」の生き方に根拠を与えた一方、個人の無意識に根を下ろした個々人の自己実現の要求は、社会改革の努力から目をそらさせ、個人の選択を工夫すれば、社会構造レベルの矛盾が生んだ社会の歪みを解決できるかのような空想を植え付ける方向に作用しやすい。働くことが生活の経済的基盤を提供しない社会構造に由来する人生の苦痛を、社会の改革によってなくそうとするより、働く個人の主体的選択や仕事の充実感の追求という自助と自己責任の問題に転嫁し、その理想を追い求める自分に希望を感じ取らせて、社会的・経済的に弱い立場に置かれる苦痛をまぎらわす生き方に、疑問を感じにくくしている側面がある。

早期離職と進路変更

青年は、このように多様化し流動化して目まぐるしく変化し続ける労働の要求に、ある距離をおいて対していくためには、特定の職業と職場が提供する特定の知識体系や技術体系に、あまりに強く関与しないほうが得策であると敏感に感じ取り、さらに最終的な決定はできるだけ先送りするという適応的な生き方を選んでいるように見える。平成 17 年度「青少年白書」によれば、学校卒業者の離職状況は、中卒者・高卒者の就職後 1 年目の離職割合が高く、特に中卒者は 4 割を超え、就職後 3 年間で中卒者では全体の 7 割以上、高卒者で 5 割近く、大卒者でも 3 割以上が離職して(俗に「七五三現象」ともいう)、職場や進路を選び直している。最初に進路選択のカギをにぎる情報を与える重要性が、改めて指摘されよう。

進路の選び直しやさまざまな挫折を経て、人生の選択が自他に対する重い責任をとまうと身にしみてわかった青年には、夢や希望は常に現実の不安や緊張と背中合わせでもある。また苦勞の多い生育過程で人生の深淵を垣間見て、心の拠り所を求め、真摯に良き進路選択を期する若者も少なくない。個人の生きる姿勢は、個人の過去と未来から導き出される。青年は困難を越えて成長していくのである。

スタディガイド（学習指導書）＜教育相談＞

『要説 発達・学習・教育臨床の心理学』

2007 年 4 月 1 日 第 1 版第 1 刷発行

2016 年 3 月 1 日 第 1.1 版第 1 刷発行（科目表記修正）

発行所 法政大学通信教育部

102-8445 東京都千代田区富士見 2-17-1

電話 03 (3264) 6557

印刷所 株式会社 エイチ・ユー

102-0073 東京都千代田区九段北 4-3-16

電話 03 (3264) 9569